

研究報告

なぜに私は金メダリストの哲学者に魅了されたのか

関 根 正 美 (スポーツ哲学研究室)

はじめに

本稿は2017年10月19日に本学総合スポーツ科学研究センター主催のマンスリーセミナーでの報告内容に基づいている。このときの内容は、2013年3月6日に岡山大学で行われた「耳学問の会」での講演内容を引き継いだものである。「耳学問の会」とは当時の岡山大学岸本廣司教授(政治学)が主催されていた分野横断的な勉強会である(岸本先生はすでに岡山大学を定年退職されている)。2013年3月に筆者が岡山大学を退職するにあたって、最後に表題のタイトルで話をする機会を得た。岸本先生にこの場をお借りして感謝申し上げる次第である。そのようなわけで、本稿は2013年、2017年と同じタイトルで内容を多少なりとも改変したうえで、2017年の内容にさらに可削除を加えている。本稿がオリンピック研究に関わる内容であることを考えて、本誌に投稿する次第である。

1. 金メダリストの哲学者あるいは学問の十種競技者

私は『ハンス・レンクのスポーツ哲学に関する研究』というタイトルの博士学位請求論文を1996年に筑波大学に提出して学位を頂きました。それを3年後、1999年に不昧堂出版から『スポーツの哲学的研究：ハンス・レンクの達成思想』として、学位論文の内容を若干アレンジして研究著書としてこれを出版いたしました。学位論文などの研究書は売れません。ですから、出版社は当然

受けてくれないわけです。人文系の方は、特にこういうパターンが多いわけです。それでどうしたかということ、当時は文部省の、いまの学振(日本学術振興会)の科研費の研究成果公開促進費をとりまして、それで出版できたということです。

学位論文を提出するにあたっての主指導教員で主査が片岡暁夫先生、副指導教員副査が山本恒夫先生(教育学、生涯教育)、同じく松村和則先生(スポーツ社会学)、そして論文副査として清水諭先生(スポーツ社会学)が審査に加わってくださいました。

ところで、このレンクという人はどのような人かということで、(配布資料の)2枚目の「ハンス・レンク教授略年譜」を見ていただきたいのですが、この人は1935年に生まれましてフライブルク(大学)とキール大学で数学、哲学、社会学、スポーツ科学、心理学などを学んで、1960年のローマオリンピックで金メダルを獲っています。それが金メダリストの意味です。その他にも、ドイツ選手権を数回獲ってヨーロッパ選手権もエイトで2回勝っている。さらには、1964年の東京オリンピックのときはコーチとして戸田にきています。そのときは、ドイツは銀(メダル)でした。あと、監督として世界選手権でもエイトで優勝させています。これがいわゆる金メダリストとしての競技者ならびにコーチの側面です。

ハンス・レンクが哲学者としてどういう人かといいますと、1961年にキール大学で博士号を取って1966年にベルリン工科大学で教授資格を取るわけですが、その後、1969年に34歳でカールスルーエ大学哲学正教授になっています。ドイツは

正教授ポストが非常に少なく、日本でいう国立大学のようなものしかありませんでした。そこで34歳の正教授ということで当時でも非常に若い教授だったみたいです。これから本人の紹介の映像をご覧くださいませけれども、教授就任の講演のときの映像もちょっと映っています。レンクは社会学の学位や教授資格も取ったりしてキャリアを重ねていくわけですけれども、1980年、国際スポーツ哲学学会会長、それから1991年にドイツ哲学学会会長をやっています。このとき、1992年にちょうどドイツ哲学学会会長をやっていたときに筑波で国際学会がありまして、そのときに招待講演をしてもらう予定だったのですが、ドイツ統一に伴う哲学の大学の人事をやらねばならないということで来日できませんでした。後でその時の事情をご本人に聞いたら、「東ドイツの哲学の教授をほとんど解雇して、西ドイツの教授に入れ替えただ」みたいなことをいっていました。ちなみに、ベルリン・フンボルト大学の教授だったエルク・フランケ博士もレンクの弟子でした。その後、世界哲学アカデミー会員(配布資料においては「世界哲学アカデミー委員」)になったり、2005年から2008年まで世界哲学アカデミーの会長を務めたり、パリに本部のある国際哲学研究所の所長なども務めていました。レンクは著作が編集も入れて、2～3年前までで126冊くらいありまして、論文がだいたい1000くらいある人です。

僕が学位論文に着手したときは、レンクの翻訳がなかったんです。だから、原書で読めばいいやという感じで(研究を)始めたわけですけれども、そのレンクという人がどういう人か、百聞は一見に如かずということで映像をお願いします(映像省略)。

2. Eigenleistung をめぐって

映像からしてハンス・レンクという人は、こんなタイプの人です。では、この人の思想内容のどういったところに私が興味を持ったかといいます

と、(配布資料の)2番の「Eigenleistung をめぐって」ということです。レンクの主要概念、一番重要な概念がこの‘Eigenleistung’という概念でして、これがなにかというと3行目(配布資料:「独自達成? 自己達成? 固有の達成? 独創的達成?」と記載)にこれをどう訳すかという問題に突き当たります。「独自達成」なのか「自己達成」なのか「固有の達成」なのか「独創的達成」なのか。

この問題をめぐりまして、私はかつて岡山大学教育学部の研究集録というところに1997年から1998年にかけて4篇にわたってこの問題を論じる論文を書きました¹⁾。この要点を申し上げますと、‘Eigenleistung’の‘eigen’というのは形容詞のeigenです。このeigenの意味は、ニュアンス的にはあまり良い意味がありません。それは基本的に「自己の」とか「自分の」という意味なのですけれども、ただ非常に独我的といえますか独占的といえますか「我が物にする」という意味が強くて出てきます。極端ないい方をすると、人のものだろうがなんだろうが自分で自分のものにしてしまうという、そういうあまり良いニュアンスがないんですね。しかし、あえて(ハンス・レンクは)eigenを使っているのです。1983年の著書に*Eigenleistung: Plädoyer für eine positive Leistungskultur*というのがありまして、ここで集中的に彼はEigenleistungについて語っているのです。ここを読みますと、例えば47ページ、「独創性(Kreativität)と個人性(Individualität)は互いに相関関係にある」というようなことをいっていたり、後の文献でも似たようなことを繰り返して述べています。私は岡山大学時代の一連の論文のなかで、このeigenというのは非常に個人性の強い概念ではありますけれども、創造性と常にセットになってこの概念が語られている点を明らかにしました。この創造性ということを彼は非常に——Eigenleistung 概念のなかで——重視しているのだと結論付けました。ということで、私の結論としては、Eigenleistungは日本語で「独創的達成」と訳すべきだということで学位論文の

なかでも展開していますし、1997年から1998年にかけて(岡山大学教育学部の研究集録において)それを論証したということになります。

ただこれについてはやはり、学会関係者から異論をいただいたこともありまして、「独創的達成」というと創造性が非常に前面に出すぎているのではないかというのですね。しかし、私としては自信をもって「独創的達成」と訳すべきだと主張しています²⁾。

このEigenleistung(独創的達成)、これはレンクがいうには、スポーツ選手というのはこのEigenleistung(独創的達成)を成す存在だというわけです。つまり、スポーツ選手というのは、「独創的達成」を成す典型的な存在なのだ。一般的に人間存在は、生きて存在しておりますけども、この「独創的達成」というのが人間の生のシンボルという言い方をレンクはしています。本来的な人間の生き方のなかで「独創的達成」を成すということ、これが人間としての本来の在り方だということです。そのなかでもスポーツ選手/競技者というのは「独創的達成」を成す典型的な存在だと彼はいうのですね。

なぜ彼がそういうかということ、(配布資料の)2番の「Eigenleistungをめぐって」の最初の一行にあります(配布資料:『達成』Leistung論争1960~70年代新左翼による批判」と記載)。特に、西ドイツはLeistung, 達成論争というのがあって、1960年代から1970年代、当時の西ドイツの新左翼——左側の社会批判をする人たち——が達成批判というのを展開したんですね。要するに「達成(Leistung)」というのは、労働の世界であり強制の世界であり非人間的な概念だと。新左翼の意見としては、達成原理というものを基盤にするような社会は、これは克服されて然るべきだということになります。スポーツ選手も達成する存在だというけれども、スポーツ選手こそまさに労働の歯車であり、もっと辛辣ないい方をすると、当時この新左翼からスポーツ選手に浴びせられた批判で「達成ロボット」だと言われたわけです。あ

るいは、「メダル製造マシン」だというような批判がスポーツ選手に対してなされたのですね。

それに対して達成概念というのは、そうではないのだということをレンクなんかは事あるごとに論文や著書のなかで書いてきているのですね。そういった背景があって、Eigenleistung(独創的達成)というのを中心的な概念として、彼はスポーツ哲学を進めていくわけです。

3. Eigenleistungの社会哲学

その次、(配布資料の)3番ですが、「Eigenleistungの社会哲学」ということで、Eigenleistungを一つの人間の生きる原理とした場合に、(ハンス・レンクにおいて)どう応用編が語られるのかということ、ここでトレーニング(コーチング)論ということも挙げているのですが、彼はコーチングに関しても自分が競技者でありコーチであったわけですので、Eigenleistung(独創的達成)を一つの中心概念として展開するわけなのです。それが三つのトレーニングタイプ、コーチングタイプ・スタイルとして語られます。そのなかでも、「民主的トレーニング」スタイル、あるいは「民主的コーチング」スタイル、これが最も理想的とまではいわないのですが、自分たちがやってきた限りで、あるいは調査・研究した限りで競技者の達成能力と知的能力を伸ばすのに適していると結論づけているのですね。

これがレンクにおける1つの応用哲学・社会哲学なわけです。そのレンクの「民主的トレーニング」あるいは「民主的コーチング」で気をつけなければならないのは、あくまでもこれはある一定レベルの知的なアスリートを対象にした場合であって、例えば大学生ですよ。具体的には、大学生、社会人を対象にしたコーチングやトレーニングのときに「民主的トレーニング」は可能なのであって、そうではない十分にそこまでいっていない存在——日本でいえば中高生くらい——を対象にして、しかも短期的な結果を出すのであれば「民

主的トレーニング」は不適切だといっているんですね。その場合は、いわば「専制的トレーニング」あるいは「権威主義的 Autorität トレーニング」というタイプがあるんですねけれども、それが適しているといっています。

この「民主的トレーニング (コーチング)」, ここでその鍵になるのが「対話」ですね。「議論」, 「対話」それがその鍵になるのだと。それができない限りは、「民主的トレーニング (コーチング)」スタイルは、成功しないということを論じているわけです。

4. 今後の研究

こんな感じで、非常にシンプルにレンクのスポーツ哲学の中身を紹介してきたわけですが、では私自身そこからどういうところに興味を持ちながら、どう自分の研究としてレンクの内容をなぞらせるだけではなくて、自分の問題として引き受けて展開していこうとしているのか、というのが4番「今後の研究」というところになります。

そこを次に見てみますと、カール・ヤスパースの言葉で「真理を所有することではなく真理を探究すること」、これが哲学の本質なのだというのがあります。だから哲学というのは、「哲学すること」ここに本質があるのだということをヤスパースはいうのですね。それを踏まえて今度はレンクの思想内容から、レンクがこういっているということだけではなくて、私自分の問題としてどうこれから真理を探究できるのか。このレンクとヤスパースの2人の哲学者から、自分は何を引き受けてどのように思考を展開していくのかということで、今度は「1935年生まれのレンクに導かれるように」(配布資料)に話は移ります。

1935年にレンクは生まれるわけですが、その4年前に奇しくもというかヤスパースが *Die geistige Situation der Zeit* という『現代の精神的状況』という著書のなかで、こんなこと言ってい

るんですね。これは当然、当時の状況ですがけれども。「スポーツは、単なる遊戯でも、レコードを作ることもない、それはむしろ奮起し立ちあがることの観がある」(飯島宗亨訳, 理想社, 1971, p.93)。まさにこれだけ読むと、2011年の東日本大震災のときにスポーツが復興に向けて非常に力を持ったと、あるいは今度のオリンピック・パラリンピックなんかでも非常に人びとを勇気づけるということ、これの裏付けとも取れるわけです。

だけどヤスパースは、スポーツと人間はそれではだめだという立場なんですね。で、次の言葉になります。「しかし、スポーツが合理的な現存在秩序の限界として現れようとも、スポーツだけでは人間は自分を獲得するわけではない。人間は、肉体の鍛錬と、生命を賭けた勇気における奮起と、統制のとれた形式だけをもってしたのでは、自分自身を喪失する危機を克服することはとうていできないのである」(飯島訳, pp.94-95)。ですから、ヤスパースの立場でいうとスポーツで勇気を得たりとか、そのレベルでは人間の本来の生き方、ここにはつながっていかないんじゃないかと。では、人間が個人レベルで「自己」「本来の自己」であろうとすると、自分の生き方をしたいというとき、しようとするとき、あるいは人間自身どう生きるかということ考えたときに、どのようなスポーツのあり方が問題になってくるのか。そういうレベルでスポーツが存在する、あるいはスポーツに関わらなければ、「本来の人間」とか「本来の自己」ということ、これはやはり達することができない。ヤスパースはそのように考えるわけですね³⁾。

では、スポーツというのをどう捉えてスポーツはどう在るべきなのかという問題にいきます。次、2枚目の資料をご覧ください。表現は違うのですが、1938年、これはレンクが生まれてから3年後ですが、『ホモ・ルーデンス』で有名なホイジンガは、『ホモ・ルーデンス』のなかで「スポーツは遊びの領域を去っていく」ということをいっています。この1938年というのは

非常に微妙な年で、当然ナチスドイツと関係があるわけです。この『ホモ・ルーデンス』を書いた確か次の年に、オランダは——ホイジンガのオランダは——、ドイツに侵攻されているわけですね。半年後くらいの出来事です。そういう状況でホイジンガは、スポーツというのは遊びという人間の非常に根源的な領域から去ってしまっているのだと。そういうことをいうのですね。

では、そういったスポーツというものの認識というものを、どうわれわれが受け止めていくかということで、現代オリンピックの状況をどう捉えていけばいいのか、これが私のいまの研究課題の一つになっています。レンクは実際オリンピック論を結構書いていまして、当然やはりそれだけ思い入れがあります。私の学位論文では、ある意味で意図的にそれを取りあげませんでした。どうしてもオリンピック論をいれられなかったんですね。しかし、このオリンピック哲学はレンクのなかでもかなりの文献の量がありまして、彼の哲学において本来のオリンピックとは何かという問題は依然として大きな位置を占めていると思われまます。これをやはりこれからやっていかねばならないという地点に自分はいるなと感じています。

レンクは、オリンピックに対しては、特にIOCの在り方とか非常に批判的なんですね。クーベルタンは評価していますし、あと案外いまは批判されているカール・ディームも評価しています。確かにカール・ディームは、ベルリンのときの組織委員長でしたのでナチスとの関わりということがいわれますけれども。しかし、そうした政治的状况とは別にオリンピックの思想だけを見たら、カール・ディームはそれほどクーベルタンから離れていないみたいなことをやはりいうのですね。

そのことでいうと、少し脱線しますがけれども、レンクは——ここではヤスパースを引きましたけれども、ヤスパースの最初親友であり後に決別することになる——ハイデガーに対しては、結構親近感を持っています。レンクに対して「ハイデガーについてどう考えていますか」と私が聞いたとき

に、「ハイデガーはナチスへの加担がいられているけれども、あの時代のなかではハイデガーはあせざるを得なかったんだ」と（ハンス・レンクがハイデガーを）非常に弁護していました。しかしその、ナチスへの加担とは全く別に、ハイデガーの哲学は、「あれは素晴らしいもの。古代ギリシャからしっかり彼は考えていて、ハイデガーの哲学は依然として最も重要な哲学になるだろう」ということはレンク自身がしていました。ここはちょっと、（ハンス・レンクとハイデガーにまつわる）人間関係があるのではないかというのはあるんですけどね。レンクは、フライブルク（大学）の学生のときに、シュヴァルツヴァルトでハイデガーの講義を聴いているんですね、実際に。ハイデガーは第二次大戦後、ナチスに加担したということで大学を追われます。で、公職追放で大学では講義できなくなるわけですがけれども、それで私塾みたいな形でシュヴァルツヴァルトの山のなかで自分でゼミナールを開いて、講義をしたそうです。ちょうどその頃、1950年代初頭に、レンクはフライブルク（大学）の学生で哲学を学んでいまして、そこで、個人的にハイデガーの講義を聴きにいったといっていました。その今はホテルになっているシュヴァルツヴァルトの場所には、2007年の夏に私も連れていってもらったことがあります。ハイデガーが散歩をしていたという哲学の道を一緒に歩いたりしながら、レンクから「俺ここで、このあたりでハイデガーの講義聴いたよ」ということを聞いたときは、「おー」と個人的に思いました。

脱線しました。（配布資料の）2ページの続きいきたいのですがけれども、「大衆のアルコールの代償ではなく、実存を生きる人間のためのスポーツは可能か？」（配布資料）という点です。最近サッカーのワールドカップの予選とか見ていまして、やはり一体なんのためにスポーツを盛り上げてスポーツに参加しているのだろう。結局、スポーツ以外に熱狂する対象を人びとが見つけれられるのであれば、スポーツでなくてもいいんじゃないか

と。そうすると、スポーツというのは、人間が生きてするために必要だといわれるときに、どういうスポーツが人間が生きてするために必要なのか、それをやはり、概念・言葉で明らかにしていかなければならないだろうと考えています。

当然それは、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを対象にしても、なんらかのコメントは出さなければならないのではないかとの思いにつながっています。それでたまたま科研費の研究課題『オリンピックの臨床哲学：人間的価値からの持続可能なオリンピックに向けて』というテーマで、2017年からあたっていますので、いい機会ですからこれからオリンピックのことを真面目に少し考えてみたいと思っています。

この研究はオリンピックのIOCの権威づけから離れて、やはりクーベルタンに帰って考えていくようなことにはなると思います。それを応用的に臨床哲学に結びつけようというのは、かなり無謀といえ無謀のように見えますけど、研究というのはやってみないとわからないですよ。

5. 生・スポーツ・哲学

それで、5番「生・スポーツ・哲学」にレンクの思想に戻ります。レンクもそういった *Eigenleistung* をキー概念にして、スポーツ哲学を展開していくというのは、これは楽観主義的、理想主義的だというイメージを持つわけです。実際、レンクは、理想主義的です。彼の哲学の著書を読んでも、やはりその背景には、カントの理想主義というのがどうしてもあるような気がしてならないんですね。まさに叡智界を想定したり。それに近いことが、やはり *Eigenleistung* (独創的達成)、達成する存在という人間理解にも表れている気がするんです。

では実際に、われわれ人間が、すべての人がそんな創造的に、それから個人的に独自の日々なんかを成し遂げていけるのか、それから人生を通して、どんな人も万人が、自ら創造的且つ独自の生

き方をして行為をしていけるのかということ、それは結構厳しい見方だと思います。だけど、あえてレンクは、それがやはり人間の、そういう道が人間には開かれていることを言おうとしているのではないかと。これは私の解釈なのですがそれでも、あくまでも、独創的達成が本当に人間が生きて道なのだということを手を変え品を変え、しつこく論じるわけです。

彼がまさに、*Eigenleistung* 「独創的達成」の体现者としてどう生きてきたのかというのを2008年に(岡山大学研究集録)書きました⁴⁾。1983年、レンクの *Eigenleistung: Plädoyer für eine positive Leistungskultur* という著書の最後は、次のような言葉で終わっています。「われわれは人格も自由も、自らの力で手に入れなければならない。理想的で積極的な達成文化の中で、成し遂げる存在は自由な自主独立と自己の活動を通して自分を形作る。これまでの私の主張をゲーテの格言になぞらえて、本書を締めくくろう」(S.209)ということで、最後ゲーテの詩をもじって終わっています。「これが知の結論だ：自由も生も日々(成し遂げ)勝ち取ったもののみがそれらを享受するに値する“Das ist der Weisheit letzter Schluß: Nur der verdient sich Freiheit wie das Leben, der leistend sie erobern muß”」(S.209)。

これがレンクの主張の非常にダイレクトに出ている部分なのですね。さっきもいいましたけれども、本当にわれわれみんなが、こういった生き方が可能なのか、こういった生き方をしないと人間じゃないといわれるのかといわれると、これはちょっと困ったことなのですが、レンクの立場としては、カントの立場と似ていて、そうじゃないと人間じゃないと、そういう生き方しないと人間じゃないとはいわないけれども、しかし少なくとも人間には、こういったところを目指して生きる生き方というのが開かれているのだと。それをやはり、開示する、いわば人間の尊厳を理性ではなくスポーツの文脈から見せるといったところに主

眼があるのではないかと思うのです。

6. 人文学としての学問とは？

最後「人文学としての学問とは？」ということで、私なんかは人文学のスタイルで研究を、文献研究をやっています。最近の学術研究の動向を見て、やっぱり生きづらいなと感じます。

話は「エビデンス万能の時代に」（配布資料）。いまは、人文系もやはり「エビデンス」というんですね。「エビデンスがあるのか」とか「エビデンスが必要だ」とか。これがまた大学の運営なんかも、特にそうだと思うのです。しかしやはり、エビデンス主義というのは、何か抜け落ちている気がしてならないのです。例えば、「エビデンス」ですべて済むかという、やはり論理がないと説得ができないだろうと思いますし、さらに論理プラス、あえて人文系の立場でいったらやはり学問には——妄想といったらいいすぎですけども、空想でもいいすぎかな、想像性、想像力ですね、イマジネーションの方ですね、imageの方ですよ、そういった意味での——想像というのを、もっと人文系は発揮していいんじゃないかと思いません。

よく今は「哲学すること」と、「哲学研究」は全く別だというわけですけども、本来の「哲学する」というのは、対話をしながら真理を探っていくのが哲学の本来のやり方であり、目指すべきところなわけです。しかし、いまの状況は研究論文として「哲学研究」をしなければならないとなると、「愛」とか「正義」とか「悪」とかそういった重要なテーマについて対話を続けるというよりも、もうちょっと成果が上がりそうな細かいテーマを選んで、ディフェンス重視で小さい論文を書いていくというのを当然われわれはしなければならないわけです。そういう時代、状況のなかで、じゃあ「哲学すること」というのは、どう実践が日々可能なのか。ここに非常にいま、悩みがあるわけです。そういったなかで、われわれは想像

力をもうちょっと働かせて、もっと重要な問題、スポーツであれば、本来のスポーツの本質とはなにかということの大上段に構えて、もう少し日々の思索を続けていけないものかなというのが、悩みの一つとして、考えとしてあります。

マルクスは確か、「空想から科学へ」ということを経済学を科学として成立するためにいったと思うんですけども、スポーツ哲学はむしろ、「科学から空想へ」というのもありではないかと思えます。怒られますかね、あんまりこういうこというと。

それから次、「時代の流行を解釈することで足りるのか？」（配布資料）。まさにこれ、「バスに乗り遅れるな」っていうのがやはり時代の流行です。スポーツを取り巻く状況も、こういう状況がありますよね。そのなかでわれわれは、「哲学すること」にどういう意味があるのかと考えるわけです。やはり、「バスに乗り遅れるな」というなかにあって、なんらかの異議申し立てが必要で、これはやはり哲学がやらなきゃいけないんじゃないかと。これ勇気があるんですけどね、異議申し立てっていうのは。「いや、そんなこといったらちょっとまずいんじゃないか」といつも思ってしまいます。で、もう1つその異議申し立てをするからには、その異議申し立ての根拠として原理論がやはり必要なわけです。そこで、いまのスポーツの状況に対して異議申し立てをするその原理論を、どう作っていくのかという問題がある。いまオリンピックは商業主義に走りすぎている、あるいはスポーツが商業主義に絡めとられているというのであれば、なぜ商業主義というのがスポーツの本来性を崩すのか、その根拠をやはり理論づけていくのは哲学の仕事かなと思います。

それから、「本来的なるものをつかむこと」（配布資料）。やはりこれは、本質ですとか理念、これを哲学する人は手放してはいけないんじゃないかと思ってます。特にここ数十年、思想界では「ポストモダン」というのが流行りまして、要するに、「ポストモダン」では）本質なんかいないのだと。

理念や本質，そんなのではないだし，論じるのは無駄なのだ。あるのは、違い、「差異」ですよね。あるのは違いだけなんだと。それから、みんな違ってみんないい。これが、現実の姿なのだ。こういった「ポストモダン」が流行りました。

あるいはいま、スポーツがこれだけ盛り上がっています。じゃあ、どうこれから盛り上がるか、さらに盛り上げていこうと。これも1つの道だと思うのですけれども、哲学は本質は何かという問いの姿勢を崩しちゃいけないんじゃないかと思えます。だから、本来のもの——ちょっと例で取り上げていきますけれども、「スポーツとは何か?」「体育とは何か?」「スポーツを行う人間とは何か?（競技者とは何か?）」「人間とは何か?」、スポーツを通して「人間とは何か?」ということ——これを問うていくこと。できれば、こういった問いのなかから、作品という形にしたい。こういった問いを、これからどう自分の研究で形にしていけるのか悩んでいるというのがいまの現状です。

ということで、特にレンクの話のところはかなり端折ってしまったのですが、以上で私の話を終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

追記

当日の質疑応答の中で中里浩一教授（運動生理学）から「結局のところ、どこに魅了されたのか?」との質問を受けた。話の内容が散漫になってしまった結果、最も肝心の部分が伝わっていなかったかもしれない。その時の私の答えは、「人間への信頼に基づく理想主義的なところである」というものだった。今思い返してみても多少の補足をしておきたい。レンクの内容が理想主義的であると同時に、「金メダリストの哲学者」という彼の人物像そのものが、手に届かない存在としての憧れを自分に喚起しているように思える。思い返せば、「独創的達成」にもエロスの高みへの憧れを喚起するものがある。手に届くかどうかはわ

からないけれども、そこに向けて自分は生きてゆけるという、レンクの人物像と哲学内容が自分にとって暗中を照らしてくれる灯台の役割をしてくれているのかもしれない。

もっと若いときに、自分が競技を行いながら同時にまだ何者でもなかったときに、レンクの哲学と出会って見たかったとの思いが、今も自分の中に残っている。

講演内容を文字に起こすにあたっては、本学大学院博士後期課程の高尾尚平氏の協力を得た。記して感謝申し上げたい。

¹⁾ 詳細は以下の文献を参照されたい。

関根正美（1997）‘Eigenleistung’考（1）：H. レンクのスポーツ哲学における「達成（Leistung）」。岡山大学教育学部研究集録。105: 213—219。

関根正美（1997）‘Eigenleistung’考（2）：スポーツと「達成（Leistung）」の社会哲学。岡山大学教育学部研究集録。106:185—193。

関根正美（1998）‘Eigenleistung’考（3）：「達成（Leistung）」から「独創的達成（Eigenleistung）」へ。岡山大学教育学部研究集録。107:179—185。

関根正美（1998）‘Eigenleistung’考（4）：生涯スポーツの原理としての「独創的達成（Eigenleistung）」。岡山大学教育学部研究集録。109:95—98。

²⁾ もちろん、これについては明確な反証が学術論文として出されるならば撤回することも吝かではない。

³⁾ ヤスパースのスポーツ論、実存論さらにはスポーツの実存哲学というべき問題については、論文にすべく現在執筆中である。

⁴⁾ 関根正美（2008）金メダリストの哲学者—達成と静謐。岡山大学大学院教育学研究科研究集録。139: 121—127。

（受理日：2019年4月18日）